手押し車を使わないと歩けないほどの狭窄症でウツにもなったが、半年のプラセンタ療法で見事回復

清水伸一

休んでいた仕事に復帰できた

この記事では、プラセンタ療法により腰部脊柱管狭窄症（以下、脊柱管狭窄症と呼ぶ）が改善した当院の患者さんの例を紹介しましょう。

デスクワークが仕事の五十五歳の男性は、六年前から足腰のしびれや両足の下肢痛・脱力感、二〇〇〇メートルごとの間欠性跛行（足腰の痛みやしびれのためこま切れにしか歩けなくなる症状）が起こるようになったといいます。

男性は、五十五歳の若さで手押し車を使わないと歩けないことが、痛みに加えて精神的な苦痛にもなり、ウツの症状も出てきました。

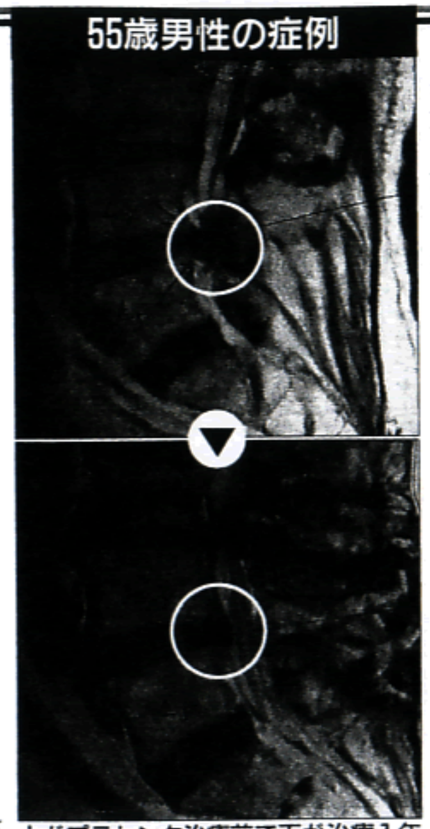
ペインクリニックでも痛みは一時的にしかよくならず、この男性は、自分自身がいやになったといいます。そんなとき、知人からプラセンタ療法を紹介されて私のクリニックにきたのでした。

本人は半信半疑ながらも週一回二アンプルのプラセンタ注射を数回受けました。

さらに週二回に増やして六カ月続けたところ、我慢できる程度の痛みまでに改善し、手押し車なしで歩くことができるようになったのです。

その喜びが大きく、男性は抗ウツ薬が不要となったのはもちろん、無口で元気がなかったのが一変して明るくなりました。

ゆっくりなら公園で一～二キロほどの散歩ができるまでになり、長い間休んでいた仕事にも復帰できました。現在、二週間に一度のプラセンタ注射を続けています。



55歳男性の症例

上がプラセンタ治療前で下が治療1年後（円内）。狭窄症が改善している。

一〇回の治療で下肢痛が三割減

脊柱管狭窄症と診断され、手術をすすめられた四十八歳の女性は、できれば手術を受けたくないと迷っているうちに、下肢痛がひどくなってしまいました。

デパートで洋服の販売員をしているのですが、下肢痛が強くなって一時間の立ち仕事もできなくなり、腰を曲げて足を引きずらないと歩けないほどに悪化しました。

そんなとき、インターネットでプラセンタ療法のことを知り、当院で週一回二アンプルの注射を受けるようになりました。

すると、一〇回の治療後に下肢痛が三割程度軽くなり、痛みが出ても腰を曲げずに歩けるようになったのです。

さらに治療を続けた結果、女性は、仕事に支障が出ない程度まで痛みが軽減しました。治療開始から八カ月たった現在も、半月に一度、プラセンタ注射をしながら元気に仕事を続けています。

★『わかさ』次号五月号は三月十六日発売です。ただし、東海・近畿並びに四国各県は十五日発売。

狭窄症による腰と足の激痛が プラセンタ注射でほぼ治り、長時間の立ち仕事も平気

清水伸一

神経ブロックでも腰痛は回復しなかった

この記事でも、プラセンタ注射を受けて、腰部脊柱管狭窄症が改善した患者さんの例を述べましょう。

ラーメン店を経営する六十二歳の男性は、一〇年前から腰の重だるさを感じはじめ、三年前に状態がひどくなりました。なんでも、腰の激痛でラーメン店での立ち仕事がつらくなり、三〇分ごとに休んで腰をもみほぐしながら、なんとか仕事を続けていたほどだったそうです。なお、このころには間欠性跛行（足腰の痛みやしびれのせいでこま切れにしか歩けなくなる症状）まで現れていました。

男性が腰痛の激しさに耐えかねて、整形外科を受診したところ、脊柱管狭窄症と診断されて通院することになりました。

そして、神経ブロック（局所麻酔薬を注射する治療法）などの治療を一年も続けましたが、腰痛は回復せず、しかも下肢痛まで起こるようになってきました。

男性は仕事を休みがちになり、家族にもお客さんにも迷惑がかかるので、ラーメン店をやめてしまおうかと思うようになりました。

そうしたころ、たまたま私のクリニックを知り訪ねてきたのです。

プラセンタ注射を行う清水先生

間欠性跛行も起こらなくなった

その男性は、できることなら腰痛を早く治したいというので、私は週一回のペースで、一回二アンプル（一アンプルは二ミリリットル）のプラセンタを注射することにしました。

すると、一〇回めのプラセンタ注射を行ったころ、動けなくなるほどの腰の激痛や下肢痛が治まってきました。また、以前は一〇分歩くこともできないほどだった間欠性跛行が改善し、二〇分程度はらくに歩けるようになりました。

その後も、間隔をあけながら六カ月間、プラセンタ治療を続けたら、腰の重だるさは感じるものの気にならなくなり、下肢痛にいたっては解消し、店を休むことなく、毎日しっかりと立ち仕事ができるようになりました。しかも、何時間も歩く機会がないこともあって、日常生活で間欠性跛行の起こることはなくなった、といいます。

この男性のほかにも、脊柱管狭窄症がプラセンタ注射で顕著に改善したという患者さんの例は続々と増えています。